圓福寺（甲賀市甲南町野尻）所蔵　木造不動明王立像について

和澄浩介

はじめに

甲賀市甲南町野尻に所在する圓福寺は、延暦年間（七八二年～八〇六年）の創建を伝える天台宗寺院である。

本稿で取り上げるのは、本堂右段中央の厨子内に安置される小型の不動明王立像（以下本像と呼称する）である。最近の堂内諸像の調査(1)の際に平安時代に遡る古像と判断されたことから、ここに紹介するものである(2)。

形状

頭頂に莎髻をあらわす。中央を円形として六方に結う。頭髪は巻髪とするが、後頭部下半は先端まで直毛の疎彫りとし、首の下まで垂らす。後髪の先端は中央に集中する。辮髪は七回ねじって左耳前に垂らす。前頭部に四弁の花飾り、両側頭部に横向きの三葉の唐草飾りをあらわす。側頭部の唐草飾りからは茎が伸びており、前頭部の花飾りと連結し、全体が円環となっている様をあらわしている。額に水波相をあらわす。眉を寄せ、左目を細め、右目を見開く。閉口し、左牙を下方に、右牙を上方に出す。耳朶は環状貫通とする。三道相をあらわす。右手は屈臂して腰の位置で剣を執り、右手は垂下して羂索を握る。腰を右に捻り、左足をやや踏み出して岩座上に立つ。火炎光背を背負う。

胸飾（銅製）、条帛、腰布、裳を着ける。条帛は左肩から懸かり、右脇腹から背面を通り、左肩側面に懸かってから一層目の下を潜り、再度一層目の上端から現れて先端を腹前に垂下する。裳は上端を一段折り返し、帯で締める。帯は結び目をあらわし、先端を膝まで垂らす。腰布も上端を一段折り返す。

品質・構造

木造、彫眼、彩色。構造は不明な点が多いが、頭体幹部はヒノキとみられる針葉樹の竪一材から彫出し、裳先を足に沿って割矧いでいると考えられる。木心は正面中央前方に外す。内刳りは行わない。両腕は肩、肘、手首で矧ぐ。両足先を矧ぐ。

表面は以下のとおり。髪は金箔地に墨で毛筋を描く。肉身部は群青彩か。条帛は地色、文様とも不明で、縁は表裏とも金箔地に墨で概ね点入り二重丸文と向かい合う半裁二重丸文を交互に描く。ただし、二重丸文が連続したり、半裁二重丸文が不整形であるなど、一部規則性が乱れる部分がある。裳は表は赤地で截金格子に四菱入り七宝繋文。縁との間に截金で二重線、菱繋ぎ文、二重線をあらわし、縁は条帛と同様とする。裏の文様等は不明。腰布表は地色は不明だが、截金四菱入り二重格子文をあらわす。縁は条帛と同様とする。裏は地色、文様は不明で、縁は条帛と同様とする。帯は地色は不明で截金で斜格子文をあらわす。縁は条帛と同様とする。

保存状態

両肩以下、両足先、胸飾、持物、台座、光背以上後補。

圓福寺の寺歴と伝来について

圓福寺の寺歴については、延暦年間の創建であり本尊は伝教大師最澄の作であるとの寺伝が伝わるのみでほとんど未詳である。本堂内左壇に安置される木造阿弥陀如来坐像は、文応二年（一二六一）と目される年記と五十人以上の結縁者名を像内に記す基準作である。また本尊木造薬師如来坐像は年記はないものの、阿弥陀如来像の結縁者と同一人物の名を多数像内に記すため、ほぼ同時期の作とみられる。両像とも甲賀市指定文化財に指定されている(3)。阿弥陀如来像銘にはその安置場所として「野尻常福寺」と記されるが、現在の圓福寺との関係は不明である。また阿弥陀如来像、薬師如来像の銘文中に見られる人物についても詳細が判明する者はいない。本像についても来歴は不明である。

本像の作風と造立年代

本像は小作りな目鼻が丸々とした顔中央に集まる点、量感を抑えた穏やかな体躯、浅い衣文などから平安時代後期の作と考えられる。腹部を膨らませずに絞り、腰の張り出しも大きくはなく腰高であるため、小像ながら長身性が強調され、やや細身な印象を与える。一方で、前後の奥行きは深く、頭部はやや前方に位置するものの胸と腹の前方への張り出しはほぼ同じで、胸を張った堂々とした姿勢をとる。このような特徴は、十二世紀前半までの猫背気味で腹を丸く突き出した作風とは異なり、やや時代の進んだ表現ととらえられる。全体的に温和な表現や動勢がほとんど感じられない点などから、平安後期様式の範疇に入るかと思われるが、上記のような特徴からその造立年代は鎌倉時代に近い十二世紀後半と考えられる。県内で類例は見出しがたいが、とがり気味の巻髪や童子のような忿怒相は園城寺普賢堂伝来の不動三尊像の中尊に近いものがある。ただ、園城寺像は肥満した童子身が強調され腹を突き出し、力の抜けたより温和な表現となっており、本像より時代が上がる要素が多い。園城寺像の造立時期は平安時代末とされるが(4)、本像はそれよりもさらに遅れての造立と考えられる。

なお、表面彩色は一部文様が乱れる部分もあるが、大らかさと精緻さを兼ね備えており、造立当初のものと判断される。

本像の特徴と位置づけ

本像で最も特徴的なのは、頭髪が金箔によって金色となる点である。当初の彩色を残す古像が少ないため比較が難しいが、彫像の不動明王は髪色は群青とし、平安後期以降であればこれに截金で毛筋をあらわすことが多い。絵画作品も体色よりも濃い群青であることが多いようであるが、赤系の髪色とするものもある。いずれにせよ、截金で毛筋を密にあらわして全体が金色に近い印象になる例はあるものの、頭髪全体を金色とし、墨で毛筋をあらわす例は他に知らない。根拠は不明ながら、極めて特異な表現といえる。近年延暦寺西尊院護法童子立像の胎内から発見された銅造不動明王立像（鎌倉時代）は、肉身と着衣が金色となる珍しい例だが、頭髪は金色ではなく、赤系の顔料に截金で毛筋を描く。また絵画作品だが、延暦寺山内寺院の不動明王二童子像（鎌倉時代）の不動明王も肉身と衣を金色とするが髪は群青もしくは黒で、截金で毛筋を描いている(5)。他の尊格に対象を広げても、頭髪のみを金色とする像は見当たらず、本像がいかに特殊であるかがうかがえる。

また、後頭部の髪の下半を直毛とし、首下に流している点も珍しい表現である。頭髪を巻毛とする十九観の不動明王像においても後頭部下半の髪の大半を直毛とする例は珍しくないが、そのほとんどが毛先のみは巻くか、外にはねるようにあらわされる。本像のように毛先まで直毛で、

なおかつ首後ろまで長く垂れ、毛先を中央に集中させ舌状にあらわす表現は異例といえる。

なお、両側頭部にあらわされる飾りは、唐草と唐草から伸びる茎の関係が明確で、現実的な表現といえる。十九観不動明王の頭飾は、巻髪に隠れる部分が多く、花や唐草の全容を明確にあらわさない場合が多い。本像のものはこれを明確にあらわしている点、珍しい表現といえる。

不動明王は総髪、巻髪、頂蓮、莎髻、辮髪の結び方など規定が多く存在するが、実際の頭部表現は多彩で多くのバリエーションが存在する。儀軌の規定などに縛られず、行者の修行による感得や意楽の像が比較的創造しやすかったかと想像される。本像の頭髪も現状ではこれに当たる規定を見出すことができず、感得、意楽の像と位置付けられる。

甲賀地域は早くから天台宗の勢力が浸透した地域であり、天台の勢力下で造立されたと考えられる薬師如来や観音の像が多数現存する。一方で、最澄開山伝承を有し本尊を不動明王とする息障寺や明王寺、修験の聖地である飯道寺や広徳寺などが存在するにもかかわらず、不動明王の古像は意外にも少ない。息障寺、明王寺、広徳寺と圓福寺は十五平方キロメートル圏内であり、本像はこの辺り一帯の不動明王信仰の一端を伝えている可能性もある。本像は類例のない異形の像というだけでなく、甲賀地域に伝わる数少ない不動明王像の一例として貴重である。

（わずみ　こうすけ・滋賀県立琵琶湖文化館主任学芸員）

註

（1）調査は二〇二三年一月十七日に実施し、筆者の他左記の各氏が参加した。
粂田美佐登、駒井文恵、佐野正晴（以上甲賀市教育委員会歴史文化財課）、植村浩次、桑原康郎、高梨純次、辻上祐貴（以上MIHO MUSEUM）、古川史隆（滋賀県文化スポーツ部文化財保護課）。
なお、撮影は小池澄男氏（MIHO MUSEUM）が行い、本稿に掲載した図版はMIHO MUSEUMより提供を受けた。

（2）法量は左記のとおり。（数値はcm）
像高六三・八／髪際高五八・六／頂―顎一二・四／面長七・七／面幅五・七／耳張一〇・一／面奥一〇・一／胸奥（右）九・三（左）一〇・七（条帛含む）／腹奥一〇・二／肘張二七・九／裾張一六・四／足先開（外）一五・八（内）一〇・四

（3）『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代　造像銘記篇　九　中央公論美術出版　二〇一三年

（4）『三井寺　仏像の美』大津市歴史博物館　二〇一四年

（5）大津市歴史博物館寺島典人氏よりご教示を得た。

圓福寺当局には調査において格別のご配慮を賜り、また本稿への写真掲載のご許可をいただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

木造不動明王立像（甲賀市・圓福寺）

図２　左側面

図１　左斜側面

図４　背面

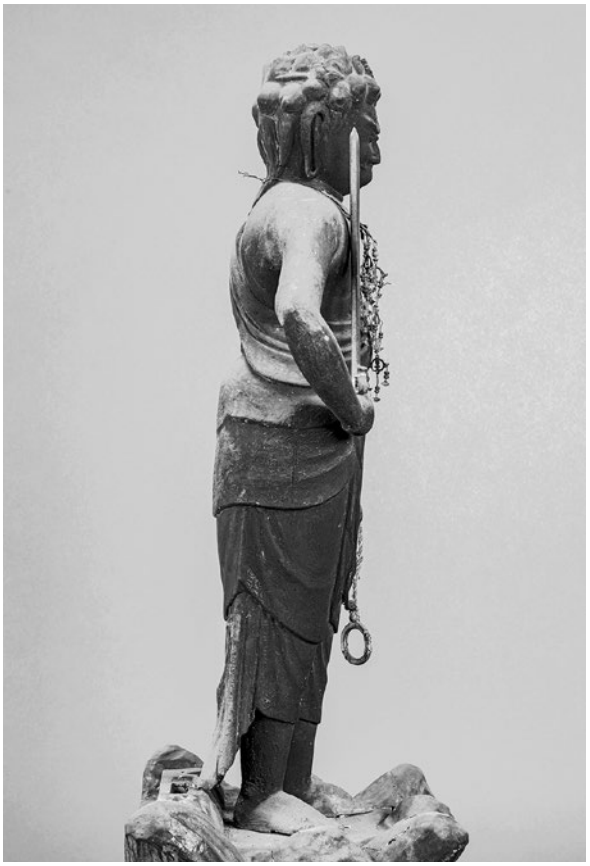

図３　右側面

図６　頭部正面

図５　右斜側面

図８　腰布　赤外線写真

図７　裳　赤外線写真

滋賀県立琵琶湖文化館
研究紀要　第四十号

発　　行　令和六年三月

編集発行　滋賀県立琵琶湖文化館

印　　刷　大津紙業写真印刷株式会社